

片岡龍・基調報告について

本郷隆盛

報告の基調について

(1) 「近代」とは何か？

- 自己と他者を断絶し、自己の「中心」化・他者の「周縁」化～差別意識
- ヘイトスピーチ、優生思想
- 「近代の暴走」とは、「すべてが「中心」化され、すべてが「周縁」化されること、
～～誰でもが「加害者」になりまた「被害者」になる可能性、個々の生命次元の
「大戦国時代」

(2) 「差別意識」の徹底的な自覚とそれからの脱却

- 安藤昌益～上下二別的差別意識の批判、「文字」の否定、すべての存在は「互性」
- 新井奥邃～この世界は、殺伐・強奪・種々の暴乱が極まり、人々の良質な性質が失われる。「寡欲」「謙道」のすすめ。

(3) 具体的な提案

- 「実心」を「魂」・「命」の意とみる～一人一人、一物一物の個性・かけがえのなさに
みる～奥邃「永遠の生命は、二でありつつ一である複数の性である。人と共に生きる力。
互いに受け入れて真実に抱き合う」。
- 「実心」(魂、命)を、単数形ではなく、複数形でとらえる～社会から離脱して「独り
善くする」のではなく、個々の生命同士の連帯(互性、複性)をのぞむ、「いのちといのち
の響き合い」
- 「「いのちといのちを響きあわせる技術の学問化」の提案。それが「実学」である。
～人間の「心」の複雑多様な「実」際を、その多様な豊かさを損なわずに学問化
することが「実学」である。

2. 感想と二、三の疑問

(1) 近代の理解について

①「近代」の歴史的な把握について

これは小川晴久さんの指摘とも関係しますが、その「歴史性と普遍性」の二面を観なければなりません。近代が、歴史の上で持つ第一の意義は「個人」の誕生でしょう。

それはある意味では「自己中心性」ではありますが同時に、それは他者の尊重でもあったはずで、それが個人主義の肝でしょう。単なる利己主義とは異なるものです。

それが、他者との違いを追い求める点では、「差別」化を肯定することは否定できませんが、それを「差別意識」として否定することは出来ませんが、個別性の追求は、同時に独創性、独自性の追求でもあります。近年、「差別」という言葉は、「優劣」的なニュアンスが薄れてきました。「区別」と同義に使われています。

②「近代の暴走」について

私は、当初からこの「暴走」がどのような意味を内包しているのかわかりませんでした。「欲望」の暴走なのか、「利欲」の暴走なのか、「資本」の暴走なのか、或いは「国民国家」の暴走・拡大なのか？ここには、「近代」のはらむ矛盾があります。これは、人間や国家の存在理由に関わる問題で、いまここで詳しく叙述することは出来ませんが、これに触れることなしには、きわめて一面的な議論になるでしょう。

(2) 研究対象について

①「実心実学」を儒教にではなく、それを批判した、昌益や奥邃など、日本の、それも東北の思想家に求めたことには賛成します。だが、両者ともに、いわば「農本主義」的な思想家です。宮教大には、かつて奥邃に強く関心を持っていた林竹二さん、日向康さんなどがいました。中国文学の小野四平さんも関心を持っており、私も知ってはいました。

②私は、30年間、庭畑で野菜や果実を作ってきましたが、「自然」との向き合いには、男女の対立も、他者との競争もありません。ただただ「自然」の働きを見据えながらそれに、順応するほかはないのですから。私は30年間、「生ごみ」を、「ゴミ」として出したことは、一度もありません。

③いま我々にとっての問題は、「自然」とどう向き合うかではなく、我々が生きている現代社会です。その社会は、あらゆるものが「商品」化され、それが「交換」される社会で、

そこでは、人間個々人のみならず、集団と集団、国家、民族などが自己の「中心」化を目指して、競争し、対立を激化させ、人間の心と身体を疲弊させているところにあるのではないのでしょうか？それこそ「大戦国時代」です。

だがそれに向き合うためには、現代世界の「複雑さ」に対する検討が必要でしょう。

(3) 三つの提言について

○「差別意識の根源は、社会的な上昇志向にある」というのは、あまりに一面的でしょう。それでは人間の向上心や歴史の進歩を否定することになります。それでは昌益が陥った落とし穴にはまることになります。社会や世界が抱える問題に向き合い、それらに参画・参決するためには、より広い教養と他者にはない膨大なエネルギーが必要です。自己の「差別化」が不可欠でしょう。「学者」も同様です。

○「心」の在り様として、「寡欲」「謙道」の必要はわかります。それに加えて、今回の日韓の政治的対立を観るにつけ、他者、他国に対するきちんとした認識の必要性を痛感しています。「隣国でありながら」というよりは「隣国」であるが故に」というべきでしょうか、互いに相手を知らないが故の摩擦があると感じています。

○この学会が、その意味では互いの相互理解に資することを期待しています。その為には、儒教的な枠組みから離れることも必要でしょう。

(不尽 本郷隆盛)

2019. 12. 20.